

島根県眼科医会リレー放談 [大学医局]

ゴールボールを通して感じた社会の姿

佐野 一 矢 (島根大学)

ブラインドスポーツであるゴールボールをはじめて早 3 年が経ちます。月に 1-2 回のペースですが、主に金曜日の 18 時から 2 時間、市のスポーツセンターを借りて練習を行っています。アイシェードという目隠しをするので、

頼るのは聴覚。そのためコートは全面で借りることになります。隣で他のスポーツをされたりするとボールの鈴の音が聴こえないからです。また聴覚以外に触覚が大切になります。コートに張られた風糸を探りながら自分の位置を確認します。感覚を研ぎ澄ませボールに飛びつき、今後は相手ゴールに向



かって投げ返します。ボールをゴールに入れば得点。得点させないためにボールを全身でブロックします。とてもシンプルなルールで誰でも始めやすいスポーツであると思います。しかし、やってみて分かるのですが、視覚障害者の方の聴覚、触覚はとても研ぎ澄まされていて「この人見えてるんじゃないの?」と疑ってしまうくらい動きが俊敏で正確です。大会に出ては毎回ボコボコにされるのですが、相手の技に脱帽し尊敬の念を抱かずにはいられません。ゴールボールをしていると障害者に向けられる「社会的弱者」という認識はなくなってきます。そのフィールドにおいては圧倒的に「強者」であるからです。もちろん晴眼者が社会のマジョリティである以上、マイノリティである視覚障害者は社会的優先度が低くなります。したがっ



て社会は晴眼者にとって暮らしやすい世の中になるため、相対的に「弱者」になるのですが、個人的な関係性を築くとその発想がなくなっていきます。厚生労働省の調査によると視覚障害者の約 4 割がほとんど外出していないと答えています。つまり障害者は社会で多くの人と会うことなく生活しているのです。視覚障害者と接したことが

なければその立場を理解することは難しく、社会をインクルーシブにもっていくためには同じ空間で生活する機会を増やし、それが「当たり前」という空気の醸成を作っていかなければならないと思います。配慮を意識することなく配慮できることこそが本来の姿であり、そこに合理的配慮という文言がなくなることこそがインクルーシブ社会



の実現と言えるのではないのでしょうか。そうは言ってもいきなり変わることは難しくそもそも障害者に接する機会すらないことが問題の原点であります。知らない人への配慮は本質的に難しいからです。私はブラインドスポーツというものに解決のヒントを見出します。ブラインドスポーツ、すなわち視覚障害者スポーツは他の障害者スポーツに比べ健常者と一緒に行う「ユニバーサルスポーツ」として成立するものです。目隠しをすることで条件を同じにできるからです。とりわけゴールボールというスポーツは、ルールはシンプルで競技性がありおもしろいため晴眼者も夢中になれるのです。ゴールボールに限らずですが、当事者との交流が生まれ



れた時に人はその人のために何かをしたいと考えるはずであり、それが結果的に「合理的配慮」につながるのかもしれない。

今年8月に視覚障害の男性がチームに加わりました。一緒に練習し大会遠征に行ったりしますが、そのことをより強く感じるようになりました。

